



御厨貴の政界人物評論

道半ばのリアリズム

民主党政権を「決められない政治」とひとくくりにしてパサッと切り捨てるのが、先の衆院選、そして今回の参院選の折の国民の気分であった。鳩山由紀夫、菅直人、野田佳彦という3代の政権の政治への取り組み方の相違は、ほとんど無視されている。それはまた民主党政権の政治家たちが、官僚や国会やメディアと切り結んだ生々しい体験をきちんと自分の言葉で語れないからでもある。

仙谷由人は、その点落選したベテラン政治家という、非常にモノを言いやすいポジションにいる。またひとくくりにされがちなきんぐの政壇との距離感が、これほどはつきりしている人も珍しい。鳩山内閣での行政刷新・公務員制度改革担当・国家戦略担当、「新しい公共」担当の特命大臣、次いで菅内閣での内閣官房長官、民主党代表代行、内閣官房副長官、そして野田内閣での民主党政策調査会長代行、副代表と、ポストは目まぐるしく変わっている。しかも仙谷自身は、鳩山政権ではまったく主流意識はなく、大勢の大臣の一人という感覚だ。菅政権では、菅総理の内閣的存在でありながら、どこか異邦人としての感覚が抜けない。野田政権では遠ざけられた印象を否めない。

ムに徹するといつてもいい。さらに国会に四六時中拘束される実態に、仙谷は驚きを覚える。これは自分のスタッフと綿密な打ち合わせをする時間も奪われてしまう。現場感覚を離れて職業としての政治家は務まらぬ。しかし仙谷は自ら「国会のどろわれ人」の渦に結局巻き込まれずにはいられなかった。かくて国会の現場は仙谷流リアリズムをもはねつける。

だが明らかに政権交代をしたらなすべき重点項目の一つが、仙谷にとってはガバナンスそのものであった。仙谷の比喩は巧みだ。いかなる企業にも人事労働担当重役がいて、労働組合と対等に話さねばならない。この報のアクセスポイントとしてか

首相の「弁護士」に

しかしそこは共通しているのは仙谷にとっての「政治家」のあり方だ。依頼人＝総理があって自らのポジションを固め、打って出るといふ姿勢である。弁護士は99人に属倒されても一人を守る仕事と語る仙谷の職業観はそのまます政治家のそれに連なる。だから「道半ば」は、理念や理想はどつあれ、まずはリアリズム

第6回 仙谷由人

せむせむ・よこと 1946年生まれ。90年衆院選で日本社会党から初出馬、初当選(旧徳島選挙区)。96年に民主党を経て旧民主党へ合流した。著書に「エネルギー・原子力大転換」。



絵・黒鉄ヒロシ

ム仙谷を始動させていく。それは、あたかも裁判に臨む仙谷弁護団といった趣になる。

官邸のカバナンスは、一方で多くのステークホルダーに目配りしながら統合を進めること、他方で民意を問うという民主主義の精神を反映させること、この二つの案配で決まるというのが、仙谷流カバナンスに他ならない。しかしメディアと共に常に民意が動くのにも対応するかが難しかったと仙谷は振り返る。この点で仙谷流リアリズムは、理念・理想・イデオロギーといったアイディアリズムと際とくせめぎ合っている。しかし民主主義の中において、仙谷は野党時代との峻別を常に考えていた。運動論は野党ならぬ、与党になったら「遠望するまなざし」を持ちながら現実対応ができれば、それは仙谷流の政治ではないのだ。

だからそれは野党への批判に転ずる。原発問題で再生エネルギーと原発ゼロに賭ける菅の行動は、仙谷にはあまりにも現実離れしたものに映る。二者択一で語れるほど原発を含めたエネルギー問題は容易ではない。もっと重層的、波状的に連関しているからだ。それを総選挙の争点化にしようとするのは、いかにがなものか。逆に菅を筆頭とする原発ゼロ派は、政治がすべてを仕切れるという幻想に陥っているのではないか。持続可能な政治体制を作るために、国民が自律的に動ける環境整備へいかに政治にできることとはないというのが、仙谷の政治観であり、彼流の「プラズマティズム」(実用主義)なのだ。

だがこうした仙谷の政治へのまなざしでは結局は党内の原発ゼロ派の動きを封じられなかった。さらに、ねじれをおこした国会での野党への対応においても、功を奏できなかった。仙谷が参議院の問責決議を受け官房長官辞任に追い込まれたのは、その典型例だ。追い込まれていると

んでも答弁に立つ仙谷の姿は、弁護士活動ならはかばかあらんといい弁論術にたけた答弁になり、時に自衛隊を「暴力装置」といって呼んでしまおうかつぎを伴い、与野党を共に納得させる「熱議デモンストラシー」とはほど遠い結果を生んだ。それこそ野党自派を、政治のリアリズムの達人、仙谷さえ倒せばとの大合唱に集結させることになってしまった。弁護士としてのリアリズムの限界が、そこにははっきりと見える。仙谷流カバナンスは、官邸では生かされたものの、国会では文字通り空転してしまっただけだ。

課題は政党経営学

実は、仙谷は自派の政治家として野中広務を高く評価する。それはなぜか。1998年の金融国会の折の与野党折衝で、両者はお互いの政治的立場を買ったのだ。「おま、よくやるよのう」的な、お互いの中にお互いを見る感覚だ。たとえ仙谷の政治は、自派でもギリギリの際どきをもった野中タイプの政治とどこかで引き合うわけである。

野田政権は、仙谷流の政治を全面的に退けた。野田のある種の保守感覚が、仙谷を危ういと認めたからに他ならない。落選した今、道半ばの思いが、仙谷には強いはずだ。

仙谷に残された課題は多い。まずは、自派の似姿にはならぬ民主党独自の「プラズマティク」なガバナンス論を、なわらび「政党経営学」を構築せねばならない。そして見るも無残な「決められない政治」からの脱却を図るべきだ。

新橋のちよっとフインザンで昭和30年代を懐かしむようなビルの一角で、「仙谷流」にいかなる花が咲くのか。仙谷によって今度こそ国会に大輪の花を咲かせてみたいと願うのは、私ばかりではないはずだ。

……

みくりや・たかし＝政治学者